

医師会だより



アドバンス・ケア・プランニング

突然の病気に備える

新型コロナウイルス感染症の大流行は、日々の暮らしだけでなく、人生まで変えようとしています。特に高齢者の方はこの感染症による急な入院により、身体機能や認知機能が悪化し、退院後も以前の生活が困難になる場合があります。突然病状が悪化した時、家族との面会もかなわず自身の思いを伝えられなくなるかもしれません。

危機に直面した時の思い

生命の危機に直面した時の医療やケアについての適切な選択をするか、新型コロナウイルス感染症に関わらず、普段から、正しい医療知識と情報をもっている医療者と繰り返し話し合っておく事が大切です。

”あなたの笑顔が必要です！”

大村市医師会潜在看護師研修事業

人生の最終段階における医療

平成19年に厚生労働省は、人生の最終段階を迎えて患者や家族と、医師を始めとする医療従事者が、患者にとって最善の医療とケアを作りあげるためのガイドラインを「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」として策定しました。

この中には、医師など医療従事者から患者、家族に対して適切な情報の提供と説明がなされ、それに基づいて患者が医療従事者と話し合いを行い、患者本人による決定を基本とした上で、人生の最終段階における医療を進めることが最も重要な原則である。患者の意思が確認できない場合であっても、家族が患者の意思を推定できる場合であれば、患者の意思を尊重し、

看護師への復職を考えている方、復職のための研修を受けてみませんか。詳しくは大村市医師会まで。

詳しくは大村市医師会まで。

患者にとっての最善の治療を選択すると記載されています。従来「終末期医療」と表記していたものについて、「人生の最終段階における医療」と順次表記変更をしていくことも記載してあります。

ACP 略称”人生会議”

日頃より、本人や家族の思いや伝えたいこと、大切なこと、不安や疑問などを医師や医療・介護に携わる人と話し合い、思いを共有し、一緒に悩み考えていくことが重要です。これらを文章に残すことで、今後の医療、ケアの方針として反映されます。その手順を「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」、略称で「人生会議」と言います。

思いを伝えよう

「死を語るのは縁起でもない。」多くの人はそう思っていることでしよう。しかし、死はある日突然やってくることもあります。その時に慌てないよう、日頃より人生の最期に対する自身の思いを家族に伝えておくことが大切です。

緩和ケア

緩和ケアとは、人生最期の時間を豊かに過ごすための、様々な方法で苦痛を取り除き穏やかに過ごすための手段です。体調によりやりたい事は変わります。隣に2割引、2km先に5割引の店があれば元気な時は2km先のお店に買いに行く方が多いでしょう。しかし体調が悪い時は「今日は隣で良いかな」と考えたりするはず。40℃の発熱がある時は外出を控えるでしょう。

緩和ケアは苦痛を取る「やりたいこと」を増やすこと。緩和ケア病棟は入退院を繰り返し利用

しみを取ることは出来ません。取ってしまう事で逆に自尊心を傷つけたり精神的な苦痛を与えてしまう事があるからです。

苦しくてペットと離れたくないと本人が思う場合、周りが引き離して入院させがちですが、本人がペットと生活する時間を大切に思うのであれば、良かれと思つた行為が別の苦しみを与えてしまう場合もあります。苦しみを取るより本人の望む環境の中でやれることを探します。

緩和ケア病棟は人生最期に利用するのではなく、状況に応じて入退院を繰り返しながら利用してもらった方が有意義と考えています。

【医心伝心】

”まちなか保健室” 中で落語調仕立ての「ACPのすすめ」を紹介しています。

ぜひご視聴いただき理解を深めてください。

